

|                     |                                                                                                                                                                                                                   |
|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 循環と発展：<br>ゲーテの叙事詩『ヘルマンとドロテア』における共同体の生成                                                                                                                                                                            |
| Sub Title           | Zirkulation und Entwicklung : zur Genese des Gemeinwesens in<br>Goethes Epos, Hermann und Dorothea                                                                                                                |
| Author              | 橘, 宏亮(Tachibana, Hirostuke)                                                                                                                                                                                       |
| Publisher           | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会                                                                                                                                                                                                   |
| Publication<br>year | 2025                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle              | 慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur<br>Germanistik). No.66 (2025. ) ,p.13- 33                                                                                                                               |
| JaLC DOI            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes               | 七字眞明教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Masaaki Shichiji                                                                                                                                                               |
| Genre               | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL                 | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20250331-0013">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20250331-0013</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 循環と発展

## ——ゲーテの叙事詩『ヘルマンとドロテア』に おける共同体の生成——

橘 宏 亮

### 1. ヘルマンの決意と共同体への展望

ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ（1749～1832年）の『ヘルマンとドロテア』（1797年）は、フランス革命がドイツにもたらした混乱に材をとった叙事詩である。以下では、この作品で提示される共同体のイメージを、歴史的文脈、とりわけ統治に関する同時代の言説を考慮しながら分析する。それにより、基本的には革命に対して懐疑的であるとされるゲーテの政治的思考<sup>1)</sup>をその根底で支える構造の一端が明らかになるであろう。

『ヘルマンとドロテア』において、共同体のイメージが最も明確に打ち出されるのはその結末部分においてである。フランス革命によってもたらされた戦乱を逃れてきた避難民たちが地方の一小都市の傍らを通り過ぎる。比較的裕福な家の一人息子ヘルマンは、両親の言いつけで避難民たちに施し物を届けに向かったところ、彼らと共に放浪する身寄りのない娘ドロテアと出会い、これに恋をする。父の反対なども乗り越え、ヘルマンがドロテアを妻として家に迎え入れたところで物語は結末を迎えるので

---

1) Joel B. Lande: *Anomaly and Danger. Politics of the Impure in Goethe's Hermann und Dorothea*. In: *MLN* 134 (2019), S. 572–590, hier S. 573 を参照。このテーマを扱った研究は数多いが例えば、坂井栄八郎『ゲーテとその時代』朝日新聞社、1996年、173～220頁を参照。

あるが、妻を得たヘルマンは次のような決意を表明する。少々長くなるが引用する。

ドロテア、世の中全体が動揺している今こそ、僕らのきずなをよりいっそう堅いものにしよう。互いにしっかりと支え合って、立派な財産をしっかりと守って、ずっと持ちこたえるんだ。揺らいだ時代に自分も揺らいだ気持ちでいると、禍を増やして、それをますます広げていってしまう。でも、気持ちをしっかりと持ち続ければ、自分自身の世界を作り上げることができる。恐ろしい動揺を伝播させて、自分自身もあっちへこっちへとふらつくなどというのはドイツ人にはふさわしくない。「これは僕らのものだ！」そう言おう、そう主張しよう。神、法、両親、妻、子供のために戦い、団結して敵に向かって散っていった決然たる諸民族が今でも讃えられているじゃないか。君は僕のものだ。今、僕のはこれまで以上に僕のものなのだ。びくびくと心配しながらではなく、勇気と力でもってこれらを守り享受したい。今回かあるいは今後敵に脅かされることになれば、君自ら僕に服を着せ、武器を渡してくれ。家と愛する両親のことは君が世話してくれると知ってさえいれば、ああ、安心してこの胸を敵に向けることができる。そしてすべての人が僕と同じように考えれば、強国が強国に対峙して、われわれ皆が平和を享受することになるだろう<sup>2)</sup>。

これが「展望 (Aussicht)」と題された最終巻の結末部分である。一つの共同体が理想として展望されているというわけである。その好戦的な性格

2) Johann Wolfgang Goethe: Herrmann und Dorothea. In: ders.: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe, hrsg. von Karl Richter u. a., München/Wien 1985–1998, Bd. 4.1, S. 551–629, hier S. 629, IX. Gesang, Vers. 299–318. 以下『ヘルマンとドロテア』からの引用は本版により、本文中に巻番号をローマ数字で、詩行番号をアラビア数字で記す。翻訳は筆者によるものである。

により、19、20 世紀における『ヘルマンとドロテア』の受容に暗い影を落とす原因ともなってしまったこの箇所だが<sup>3)</sup>、ここにナショナリズムの片鱗を見出すことは不可能ではないとしても<sup>4)</sup>、これだけをもってして、保守主義を指摘するのはためらわれる<sup>5)</sup>。ここにはむしろルソー的な共和主義を思わせるものさえある。生命と財産を守るために人々が参集し国家を定立する。成員全員の安全を確保するという使命を負った国家が、その存立を敵によって脅かされれば各人は命に代えてもそれを防衛しなければならない。国家全体の利益 (*res publica*) を志向する一般意志がそれを求めるからである。また、このように愛国心を示すことは自分自身の（正しい）意志に従うことに他ならないので、人はそれにより自由という名の徳も得る。これがルソーの社会契約論の構成である<sup>6)</sup>。ヘルマンが展望する共同体像も愛国心の理想化という点においてルソーの共和主義と共通して

- 3) 『ヘルマンとドロテア』の研究史については Yahya A. Elsaghe: Herrmann und Dorothea. In: Goethe Handbuch, Bd.1: Gedichte, hrsg. von Regine Otto/Bernd Witte, Stuttgart/Weimar 1996, S. 519–537, hier S. 532–536 を参照。
- 4) 例えば Cornelia Zumbusch: Weimarer Klassik. Eine Einführung, Berlin 2019, S. 217 を参照。
- 5) 例えば Gerhard Kluge: „Hermann und Dorothea“. Die Revolution und Hermanns Schlußrede — zwei „schmerzliche Zeichen“? In: Goethe-Jahrbuch 109 (1992), S. 61–68, hier S. 65; Yahya Elsaghe: Reinheit und Gefährdung. Zur Dekonstruierbarkeit des kleinstädtischen Idylls in Goethes „Hermann und Dorothea“. In: Werner Nell/Marc Weiland (Hrsg.): Kleinstadtliteratur. Erkundungen eines Imaginationsraums ungleicher Modernen, Bielefeld 2020, S. 123–139, hier S. 124 を参照。クルーゲもエルサーゲも共に「持ちこたえる (halten und dauern)」(IX, 300) という言葉にも表れている財産保持への意志に保守主義的性格を見ているように思われる。
- 6) ジャン＝ジャック・ルソー（井上幸治訳）『社会契約論』、『人間不平等起原論・社会契約論』中央公論新社、2005 年、199～411 頁所収を参照。Kluge: „Hermann und Dorothea“ (Anm. 5), S. 65 は「生存のために武器をとって敵を排除する」という意志が「保守的あるいは反動的な生および社会の理解」と対応していると主張するが、この意志こそルソーが共和主義の表現とみなすものなのである。

いるのである。国際秩序においては、各国がこのような「強国」としての共和国となることで勢力均衡へと至り、その状態が「平和」と名付けられる。フランスの革命家たちが多かれ少なかれルソーの影響下にあったということは言うまでもないことであるが<sup>7)</sup>、実際『ヘルマンとドロテア』の結末においては、フランス革命の諸理念が謳いあげられていると読める<sup>8)</sup>。共同体の全成員の生命・財産保護のために協働して敵にあたるとすればそれは友愛 (Brüderlichkeit) の発現に他ならず、また当然この戦いは自由 (Freiheit) のための戦いでもある。さらに、この引用では触れられていないが、ドロテアは身寄りのない娘であり、これまでも女中として他人の家に仕えてきた。そんな彼女が持参金もなしに裕福な市民の家の妻に収まってしまうのであるから<sup>9)</sup>、ヘルマンとドロテアが結ばれることで既存の社会規範や身分的差異が克服された、すなわち平等 (Gleichheit) が実現したとも読める<sup>10)</sup>。

しかし、革命の理念自体は好意的に描かれているとしても、革命の概念

---

7) ルソーとフランス革命の関係については例えばベルナール・マナン (柏木加代子訳)「ルソー」、フランソワ・フュレ／モナ・オズーフ (河野健二・阪上孝・富永茂樹監訳)『フランス革命事典2』みすず書房、1995年、1187～1205頁所収を参照。

8) Kluge: „Hermann und Dorothea“ (Anm. 5), S. 67–68 も、ヘルマンの結語に保守的な要素を見つつも、同時に、フランス革命に通じる普遍的な理念が表現されていると指摘する。クルーゲによれば、ここで表現されているのは、ドロテアが体現する「新しい時代の精神」および「市民革命の諸理念」によるヘルマンの変容であり、そこでは伝統的な市民の徳と新しいものが結合することで革命も不要となる。

9) 実際ヘルマンの父親は、当初息子に対して「なあヘルマンよ、わしの願いは、お前が近いうちに持参金をたんまり持った嫁さんをこの家に連れてくることなのだ [……]」(II, 169–170)と述べている。

10) 似たような解釈としては Karl Eibl: Anamnesis des „Augenblicks“. Goethes poetischer Gesellschaftsentwurf in „Hermann und Dorothea“. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 58–1 (1984), S. 111–138, hier S. 118–119 を参照。

を、既存の秩序を完全に破壊してゼロから新たな秩序を、しかも暴力を用いて急激に作り上げる激変であると定義した場合<sup>11)</sup>、ゲーテの『ヘルマンとドロテア』は反革命的であると言わざるを得なくなる。なぜならば本作においてヘルマンが見出す共同体のモデルは、暗示的にはあるが、既存秩序の構成要素それ自体から生成してきたものとして描かれるからである。まずはこの点を確認しなければならない。

## 2. ドロテアの重み

先の引用箇所では、革命以来の混沌とした状況、危機的な状況が揺らぎや不安定さを表す言葉（「動揺（Erschütterung）」、「ふらつく（schwanken）」など）で表現されていた。こうした状況に対して、揺らぐことなく「しっかりと（fest）」身を持していくべし、というのがヘルマンの決意である。またこのイメージにおいては、国際秩序における勢力均衡としての平和も、各強国の重さが相殺し合うことで生じる安定ということになるのである。

この揺らぎのメタファーとの関連で興味深いのが、ヘルマンが、両親に紹介すべく連れ帰ったドロテアと共に家に入る直前に起こる出来事である。ヘルマンの父が所有する立派な葡萄畑の丘に立つ梨の木の下で一休みしていた二人であったが、太陽は完全に沈み、さらに雲行きも怪しくなってきたので帰りを急ぐ。ところが、暗がりの中、丘を下る際に後ろを歩いていたドロテアが足をくじいてつまずいてしまう。

冷静な若者〔ヘルマン〕はすばやく向きを変え、腕を伸ばして、愛する人を抱きとめた。彼女はヘルマンの肩へとそっと倒れこみ、胸には胸が、頬には頬がしずみこむ。しかし鋼の意志によって欲望を抑えつけたヘルマンは、それ以上に強く抱きしめることはせず、大理石像の

11) 革命の概念については例えばモナ・オズーフ（富永茂樹訳）「革命」、フュレ／オズーフ『フランス革命事典2』（注7）877～894頁所収を参照。

ごとくじっと動かず重みに抵抗した。ずっしりとした負荷、胸のぬくもり、唇に吹きかけられる吐息の芳香を感じながら、男らしい心持で娘の英雄的に大きな体を支えたのであった。(VIII, 91-98)

カール・アイブルによると『ヘルマンとドロテア』の詩学は、象徴による想起とも言うべき手法によって規定されているが<sup>12)</sup>、この引用ではむしろ、作品の結末部分が象徴的に先取りされている。父にドロテアとの結婚を反対され、涙を流しながら母にすがると、これまでむしろ男らしさとは無縁であったヘルマンが、世の中の動揺にも揺らぐことなく、男らしくしっかりと生きていく決意をするのは、ドロテアの「英雄的に大きな体」の重みを引き受けたからに他ならないのである<sup>13)</sup>。

ドロテアの立派な体型は本作でたびたび強調されていて、二人がヘルマンの実家に着いた際にも、「花婿の体格に引けをとらない花嫁の体格」(IX, 57)が、居合わせた両親やその友人たちを驚かす。「娘の英雄的に大きな体 (Heldengröße des Weibes)」という表現は、この時点ですでに語られているドロテアの過去の体験と関連する。以前女中として勤めていた屋敷に、家の男たちが出兵で不在の折に敵軍の一隊が侵入し、家の娘たちを凌辱しようとする。とっさに敵のサーベルを奪ったドロテアは、兵士一人を切り斃した上に四人に大けがを負わせ追い払い、娘たちを守ったのであった (VI, 104-118 参照)。実はこの挿話も共和主義と関わっている。なぜならば、敵から防衛すべき財産としての妻や娘の純潔という観念は、古代ローマ史における叙述以降、共和国像と結びついてきたからである。共和国の市民たる家父の妻や娘の貞節・純潔を侵害する暴君という構図である<sup>14)</sup>。レッシングやシラー、クライストによっても取り上げられた

12) Eibl: Anamnesis des „Augenblicks“ (Anm. 10), S. 125-138 を参照。

13) 似たような解釈としては Zumbusch: Weimarer Klassik (Anm. 4), S. 219-220 を参照。

14) リウィウスのローマ史にあるルクレティアおよびウェルギニアをめぐる

このイメージが<sup>15)</sup>、ゲーテにおいては、二重の意味で倒錯的に引用される。まず、娘たちを凌辱しようとするのが、共和国の存在を脅かす暴君ではなくて、よりもよって共和主義を標榜するフランス人たちである。さらには、本来財産を防衛すべき一家の父は不在で、その任に当たるのは、同じく父の所有財としてその支配下にある一女中である。革命戦争の混乱という例外状態がもたらしたこのような秩序の乱れは<sup>16)</sup>、一家の長として妻子や財産を守ると固く決意するヘルマンの共同体像においては解消されているように見える。娘たちを救ったドロテアの強さも、その大きな体の重みを受け止めた夫ヘルマンへと引き継がれ、それにより彼のうちに自然と祖国防衛に対する自覚が生じるのである。

ドロテアがヘルマンの花嫁としてふさわしいかどうか品定めをするため避難民たちの元にやってきた牧師も、彼女の姿をみて断言する。「まっ

---

叙述において、暴君による性的な侵害にさらされる女性の身体が共和政ローマの象徴となる。この点については Albrecht Koschorke/Susanne Lüdemann/Thomas Frank/Ethel Matala de Mazza: *Der fiktive Staat. Konstruktionen des politischen Körpers in der Geschichte Europas*, Frankfurt a. M. 2007, S. 36–46 を参照。

15) この点については Susanne Lüdemann: *Weibliche Gründungsoffer und männliche Institutionen. Verginia-Variationen bei Lessing, Schiller und Kleist*. In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 87–4 (2013), S. 588–599 を参照。

16) Elsaghe: *Herrmann und Dorothea* (Anm. 3), S. 526; Elsaghe: *Reinheit und Gefährdung* (Anm. 5), S. 129–134 も指摘している通りドロテアが男性的な女として現れるのは混乱した秩序においてであり、彼女が家内部の安定した秩序に入るや否や従属的かつ献身的な妻という市民の理想モデルがそれに取って代わるのである。例外状態としての革命戦争における混乱についてはとりわけ Hartmut Böhme: *Goethes „Herrmann und Dorothea“: Liebe in den Zeiten von Revolution und Flucht*. In: Gernot Böhme (Hrsg.): *Goethes Epen und Balladen*, Bielefeld 2018, S. 61–80, hier S. 67–70 を参照。ベームはこれに関連して「野蛮な内戦のホップズの自然状態への後退」(ebd., S. 68) と述べている。

たく、彼「ヘルマン」はいいお嬢さんを見つけたものです。彼女ならば、彼のこれからの人生をたいそう晴れやかなものにしてくれるでしょうし、女らしい力を發揮して、いつでも忠実に彼を助けてくれるでしょう。これほど完璧な体（[s]o ein vollkommener Körper）であれば、そこに宿る魂も清らかに決まっています。そして、若いときに丈夫であれば（die rüstige Jugend）、幸福な老年が約束されるのです」（VI, 155–159）。強く大きなドロテアの体は健康でもあるのだ。そして美しくもある。先の引用で、つまりきそうになった彼女の体をしっかりと支えるヘルマンは大理石像に例えられていた。この点、ギリシア芸術への暗示を指摘する声もあるが<sup>17)</sup>、実際、ドロテアの身体の描写は、ヴァイマル古典期のゲーテの美的プログラムに大きな影響を与えたヴィンケルマンによるギリシア芸術の理想化を想起させるものがある。力と健康を体現する肉体の美という、今日的観点からすると問題をはらんだ美的理想像は、ヴィンケルマンによってはっきりと打ち出されている<sup>18)</sup>。ヴィンケルマンはさらに健康という要素から生殖・多産のイメージを導き出し、それにより、美を子供へと受け継がれうるものとして設定する。これにモンテスキュー流の風土論も加わり、結果として、ギリシアという民族単位での美を語る事が可能となるのである<sup>19)</sup>。

『ヘルマンとドロテア』の最終巻でヘルマンが語る展望において、敵から守るべき財産には「子供たち」（IX, 309）も含まれていた。そうだとすれば、健康なドロテアが子供を産むことも予感されているのであり、それと共に、世代を超えた家の発展も含意されていると見てよいであろう。牧師のドロテアへの贅辞にも示されている通り、ドロテアの健康な身

17) Zumbusch: Weimarer Klassik (Anm. 4), S. 219 を参照。

18) Johann Joachim Winckelmann: Gedancken über die Nachahmung der Griechischen Wercke in der Mahlerey und Bildhauer-Kunst. In: ders.: Kleine Schriften. Vorreden. Entwürfe, hrsg. von Walther Rehm, Berlin/New York 2002, S. 27–59, hier S. 30–35 を参照。

19) Ebd., S. 32 を参照。

体は幸福な未来を象徴するものでもある。健康な妻の献身的な支えを得たヘルマンは父の家をさらに発展させる。発展した財産としての家はさらに重みを増すので、その分ヘルマンの祖国防衛の自覚、すなわち愛国心もますます高まり、共和国もより堅固になることが期待されるのである。ヘルマンによって提示される共同体像は「展望」にしかすぎず、ここに未来についての決定の留保や未来の不確実性を読み取ることが不可能ではないとしても<sup>20)</sup>、健康なドロテアの体が「今や永遠のものとなったように思われた人生の来るべき幸福の、長く待ち望まれた保証」(IX, 224–225)として提示されているという点は間違いないであろう。

### 3. 並ぶ二つの指輪

ヘルマンが男らしく、大理石像のように硬直する瞬間、それまで強い娘として描かれていたドロテアはよろめく。この構図も結末部分で繰り返される。なぜならばヘルマンによる共和主義的祖国防衛の決意は、ドロテ

---

20) この点を強調する研究としては例えば Elsaghe: Herrmann und Dorothea (Anm. 3), S. 524–528; Elsaghe: Reinheit und Gefährdung (Anm. 5), S. 134–135; Stefan Willer: „Ahndungsvolle Beleuchtung“. Funktionen des Wetters in Goethes „Herrmann und Dorothea“. In: Urs Büttner/Michael Gamper (Hrsg.): Verfahren literarischer Wetterdarstellung, Berlin/Boston 2021, S. 69–87 を参照。『ヘルマンとドロテア』において度々言及される天候のイメージから議論を出発させるヴィラーは、気象現象に関わる予測が不確実であるという点に注目し、結末部分の展望もそうした観点から読む。エルサーゲはさらに、本作において牧歌的性格を際立たせている閉鎖された小都市的世界には崩壊の契機が内在しているという点を指摘した上で、そうした世界を前提としたヘルマンの共同体像にも不安定性・不確実性が内在していると読む。『ヘルマンとドロテア』における内面から崩壊させられる牧歌あるいは牧歌的なものの脆弱性については Paul Michael Lützler: Nachwort. In: Johann Wolfgang Goethe: Hermann und Dorothea, Anmerkungen von Josef Schmidt, Nachwort von Paul Michael Lützler, Stuttgart 1996, S. 96–111, hier S. 99–100; Böhme: Goethes „Herrmann und Dorothea“ (Anm. 16), S. 65 も指摘している。

ーアの弱々しさに対する反応として表明されるものだからである。この時彼女は、自分の最初の婚約者で、「自由への愛と、革新された制度の中で活動したいという欲求から、パリへと駆り立てられ、投獄されたのちに命を落とした」(IX, 259-261) 若者のことを語る。これが最後の別れになると悟っていた彼は、パリに発つ前にドロテアに対して、時代状況を説明するのだが、時代はこの若者にとっても、あらゆるものが動揺した混沌状態である。

僕は行く。だって、今地上ではあらゆるものがいっせいに揺れ動き (bewegt sich), あらゆるものが離れ離れになりそうな有様なものだから。もっとも堅固な国々において (auf der festesten Staaten) 根本法 (Grundgesetze) が解体し、所有物は古い所有者から、友は友から離れていく。恋人も恋人から離れていくのだ。[……] 人はこの地上においてはよそ者でしかないとはよく言ったものだ。今やすべての人がこれまで以上によそ者になってしまった。土地はもはや僕らのものではない。財産は渡り歩き、金と銀は溶けてその古い神聖な形を失う。あらゆるものが動揺し (regt sich), まるで世界が、形を持った世界がかつての混沌と暗黒へと解消し、また新たな形をとろうとしているかのようだ [……]。(IX, 262-274)

このようにすべてが流動的であるからこそ、新たに結ばれた繋がりも長続きするとは限らない。そこで若者は、ドロテアに対して、こうした状況を生き抜くために、常に身を軽く保っておくように勧める。「君を愛してくれる人々を清らかな心で愛し、善良な人が支えてくれるときは感謝の念を忘れてはいけない。しかしその場合でも地につける足は軽やかに保っておくんだ。そうしないと、新たな繋がりをも失ってしまったとき、その痛みが二倍になってしまうのだから」(IX, 262-274)。この教えがあったからこそ、ドロテアは、それまで生活を共にしてきた避難民たちの元を去

り、新たにヘルマンの家に入る決意をしていたのだ。しかし地面が動揺している中、足を軽く踏んだ状態であると自分自身が転倒する危険があり、ドロテア自身もその点に不安を感じている。「ああ、許して。あなたの腕にすがっていながらも震えているなんて。ようやく陸に上がった船人にも、びくともしない大地の安定した地盤がこうして揺れているように見えるのですわ」(IX, 294–296)。このドロテアを安心させるためにヘルマンが、しっかりと身を持していくという決意を表明するのである。これはドロテアの最初の婚約者が勧めた「足を軽やかに保て」という教えとは正反対のものである。土地や財産、妻子はしっかりと維持して離さず、守り続けなければならない。「今、僕のものはこれまで以上に僕のものののだ」(IX, 311)。

このドロテアとヘルマンによるやり取りの前に、牧師が婚約の儀を執り行うべく、ヘルマンの両親の指輪を外し、それを若い二人の指にはめようとする。その際ドロテアの指にすでに指輪があるのに気づき、それ受けて彼女は、かつての婚約者について語っていたのだ。自分の置かれている状況についての不安の表明でその語りを終えたドロテアは、「二つの指輪を並べてはめた」(IX, 297)。ヘルマンの両親の婚礼の証である指輪と革命に熱狂しパリで客死した革命家の指輪とがドロテアの指に並ぶのである。これにより、ヘルマンの両親が体现する価値・思考と革命家が体现するそれとの併存か調和が暗示されているととるのが自然だろう<sup>21)</sup>。ヘルマンによる祖国防衛への決意が革命の諸理念と合致しているという点はすでに確認した。そうだとすれば、ヘルマンとドロテアにおいて、自由への愛からパリへと駆り立てられた若者の精神が生き続けるとも言える。

21) そのような説としては例えば Zumbusch: Weimarer Klassik (Anm. 4), S. 221 を参照。Lützer: Nachwort (Anm. 20), S. 105 も二つの思考の併存が暗示されていると指摘する。それに対して、二つの思考のうちどちらをとるのか決定が下されずに終わると読む Elsaghe: Herrmann und Dorothea (Anm. 3), S. 528 にとっては、並ぶ二つの指輪のイメージも留保された決定の象徴である。

ドロテアが彼から贈られた指輪をはめたままであるのも、それと対応しているのだ。では両親の指輪はどうか。ヘルマンの共同体像において、繁栄を予告するからこそ保護されるべき土地を含む財産は、彼が父から受け継ぐものである。またそもそも両親も敵から守らねばならないと述べられているのだから、この理想像には、ヘルマンの父と母が代表する価値や思考も統合されている。しかしそれだけではない。最終巻の冒頭で牧師は、人間の生と死について語りながら、次のような希望を述べる。「若者には気高く成熟した老年の価値を教え、年をとった者には若さを教えて、両者が永遠の循環をたのしみ、それにより生が生のうちに完成するということになればよいのですが」(IX, 52–54)<sup>22)</sup>。循環しながらも発展し完成へと向かう生のこの理想像が、結末のヘルマンの言葉を先取りしているのは、発展や完成というイメージにおいてだけではない。ヘルマンの共和国像の生成過程それ自体が循環でもあるのだ。なぜならば、ヘルマンとドロテアが、戦争によってもたらされた混乱という危機的状況のなかで結ばれたのと同様に、ヘルマンの両親を結びつけたのも町の火災によってもたらされた困窮に他ならないからである。ドロテアとの結婚に反対する父に対してヘルマンは述べる。「この地上を覆っている悲惨と困窮はひどいものです。この不幸から幸福が生まれてはいけないのでしょうか。そして、お父さんとお母さんが火事を喜んだように、僕が、花嫁の腕の中で、信頼できる妻の腕の中で戦争を喜んではいけないのでしょうか」(V, 104–107)。ドロテアの指にヘルマンの親の指輪がはめられるのは、この循環を暗示するものでもある。そもそも指輪の円環自体が循環の象徴なのだ<sup>23)</sup>。しかし、革命が象徴的に二十年前の火災を想起させるのであれば<sup>24)</sup>、この火災をめぐる描写は革命についても何かを語っているはずであろう。以下ではこの

22) この箇所については ebd., S. 530; Zumbusch: Weimarer Klassik (Anm. 4), S. 221 も参照。

23) Ebd. を参照。

24) Eibl: Anamnesis des „Augenblicks“ (Anm. 10), S. 130 を参照。

点を確認する。

#### 4. 町の暗渠と村の外の泉

ヘルマンの母によれば、「この町を飲み込んだ恐ろしい火災」が発生した当時、雨の降らない乾燥した暑い日が続き、町にはほとんど水がない状態であった（II, 112–114）。その結果、町はずれで発生した火は「自分で風を巻き上げながら、通りから通りへと瞬く間に広がってしまった」（II, 117–118）。この火災はヘルマンの両親を結び合わせただけではない。これがあったからこそ、その後、町の防火設備が整備されたのである。その事業の責任者の一人が「市参事会で土木担当を六度務めた」（III, 33）ヘルマンの父であり、彼は自分の功績について自慢げに語る。

誰もが舗装された道や町中に張り巡らされた水量の多い暗渠に感心するではないですか。これが使えるからこそ安全が確保されるのです。おかげで火の手があがってもすぐに消し止められるのですから。これらすべてはあの恐ろしい火災のあとになされたのではなかったですか。（III, 29–32）

外的かつ偶然的な要因としての火災<sup>25)</sup>によって町が壊滅的な被害を受け、この経験により火災が予見しうる危険、すなわち一つのリスクとして認識される<sup>26)</sup>。町の地下水道が整備されたのはそのリスクに対する予防的措置としてであり、これにより今後同様のリスクは制御下に置かれ町の安全も確保される。ヘルマンの父も述べている通り、町はその発展を火災という

25) Elsaghe: Herrmann und Dorothea (Anm. 3), S. 530 も指摘している通り、この火災の原因については語られない。

26) 予測不可能かつ偶然的な単なる危険（Gefahr）とリスク（Risiko）との間の概念的差異については Joseph Vogl: Kalkül und Leidenschaft. Poetik des ökonomischen Menschen, Zürich 2002, S. 165–169 を参照。

偶然的かつ外的な要因に負っているのである。

さらに、火災後の町の整備・発展に関する父の関心は「安全 (Sicherheit)」(III, 33) の確保以外にも「秩序 (Ordnung) と清潔さ (Reinlichkeit)」(III, 33) の維持にも向けられる。「塔や外壁が崩れかけ、堀には汚物が堆積し、通りに出てもいたるところにばらまかれている。石垣の石がずれていても誰も直さず、家の横木が腐っているのに新しい支えはいつまでたってもあてがわれない。そんな町がろくに統治されていないのは明らかでしょう」(III, 29-32)。父の考えでは、息子ヘルマンも、シュトラースブルクやフランクフルト、マンハイムなどの清潔で整然とした大都市を自分の目で見なければならぬ。そうすれば「自分の町も、たとえそれがちっぽけであろうとも、美しくしよう」(III, 26) という気になるであろうという期待からである。他方で父にはこの町が安全、秩序、衛生という点では、こうした大都市にも引けをとらないという自負もある。

彼にとってはさらにこうした町の統治と家の統治との間に類推関係が成り立つ。

各人が常に、維持しよう、新しくしよう、また時代の流行や外国に倣ってよりよくしようと考えなかったら、家はどうなってしまいます、町はどうなってしまいます。(III, 6-8)

家にせよ町にせよ時代の流れに合わせて発展させなければならない。火災という経験をきっかけとしたインフラ整備事業による町の発展も、こうした観点から眺められる。ここでは小都市と大都市との間にも断絶ではなく、発展を媒体とした連続性があり、だからこそ父は、「道路工事」が決定され、近々、この町が「幹線道路と (mit der großen Straße)」つながることを歓迎するのである (III, 38-39)<sup>27)</sup>。

27) この点については Elsaghe: Reinheit und Gefährdung (Anm. 5), S. 134-135 も参照。エルサーゲはこの点に牧歌的閉鎖性によって規定された小都市世

小都市の描写に見られる安全、秩序、清潔の象徴としての水という主題は、意外にもヘルマンの父親とドロテアを結びつける<sup>28)</sup>。ドロテアの人物像は、健康や強さ、美しさのみならず、秩序や清潔さによっても規定されており、例えばヘルマンは、これから彼女を品定めしに行く牧師と薬屋にその見た目を説明する際に、身長の高さに加えて「清潔な服装が目印」(V, 168) となって他の娘たちから区別できるのであると述べ、実際薬屋もそれを確認する (VI, 136–145)。清潔な服装から彼女が自分を律する人間であるということも推測されるのである。しかし、秩序と衛生の主題がより際立っているのは、避難民たちが一時的に逗留している「村の外に (Vor dem Dorfe)」(V, 154) ある泉にて展開する場面においてである。文明と自然との間の中間地帯ともいえるこの牧歌的空間<sup>29)</sup>でヘルマンはドロテアとの二度目の出会いを果たす。ドロテアは、避難民に帯同する産後の苦しみにあえぐ女のため、この「たえずきれいな水が流れ出る泉 (wo rein und unablässig der Quell fließt)」(VII, 29) から水を汲むために長い道のりをわざわざ歩いてきたのである。なぜ村の水を使わないのか、その理由を彼女は次のように説明する。「不注意な人たちが、早々に牛や馬と一緒に水源に入って行って村人全員が使う水を濁らせてしまいました。そして洗い物などで村中の桶を汚して、井戸もすべて汚れてしまいました [……]」(VII, 30–32)。秩序が失われ、誰もが自分のことしか考えずに行動するからこのような事態になってしまったのだという。町と違い村では水道のインフラが整備されていないので、水はたちどころに汚染されてしまう。自分のことしか考えない避難民たちとは対照的にドロテアが示す

---

界の不確実性を読むのである。ヘルマンの父が列挙する大都市（シュトラースブルク、フランクフルト、マンハイム）が、作品が出版された1797年当時（第一次対仏大同盟解消の年でもある）、政治的に不安定な状況に置かれていたという点は注目すべきかもしれない。

28) この点については Lande: *Anomaly and Danger* (Anm. 1); Elsägh: *Reinheit und Gefährdung* (Anm. 5), S. 126–128 を参照。

29) Lützler: *Nachwort* (Anm. 20), S. 100–101 を参照。

のは他人に対する献身である。病人の衛生面・健康面に配慮した彼女は、清潔な水が得られる村の外の泉を選んだのである。この一連の描写において示されるドロテアの秩序と清潔さへの傾向は、ヘルマンの父が、町の整備事業についての語りで示していた思考と合致する。健康的で清潔でもあるドロテアはヘルマンの父が代表する価値を最初から示していたのだ。

## 5. 都市のポリツァイと家の家政

都市や村における秩序、安全、衛生を象徴するものとしての清らかな水をめぐる描写だが、その背後にある歴史的な文脈を指摘することは比較的容易であり、それについてはすでにカール・アイブルも言及している。『詩と真実』第13章のユストゥス・メーザーに関する記述と『ヘルマンとドロテア』の親縁性について指摘したあとアイブルは次のように述べる。

メーザーの著作が決定的な影響を与えたのはゲーテの政治的見解に対してのみである。ゲーテは〔『ヘルマンとドロテア』において〕人間の共同生活を構成する根本要素を問題にしているので、この影響が再び現れ出たにすぎない。行政の専門家メーザーが興味を抱き、また行政の専門家ゲーテの関心も引いていた大部分の細かい問題、すなわち国制の問題、体僕制度、経済、道路建設、火災予防等々は、ただ暗示的に述べられるだけか、そうでなければ全く扱われない。自由な農業市民として宿屋を経営するヘルマンの父とその家は支配服従関係とは無縁だし、遠くにではあるが皇帝と呼ばれる存在がいるのだということさえ知らない。小都市の「市参事会」についてもついでに触れられるだけである<sup>30)</sup>。

したがってアイブルにとっては、この問題は周縁的なものでしかなく論じるに値しないわけだが、すでに見た通り、『ヘルマンとドロテア』にお

30) Eibl: Anamnesis des „Augenblicks“ (Anm. 10), S. 115–116.

いて火災が革命と関連付けられているのは明らかであるし、またヘルマンの父とドロテアが秩序と清潔への傾向という、本作でゲーテが強調しているように思われる主題において共通しているという点も注目に値する。そうだとすればこの問題はそう簡単に片づけてしまってよいものでもないであろう。

「行政の専門家メーザーが興味を抱き、また行政の専門家ゲーテの関心も引いていた」問題とは、同時代の政治的实践あるいは理論においてポリツァイ（Policey）と呼ばれていた行政行為一般である<sup>31)</sup>。良き秩序の維持をその目的とするポリツァイの対象領域は広く、道徳・倫理に関わる個人の振る舞いや内面の規律化から、都市インフラ整備、さらには経済政策にまで及んでいた。絶対主義の時代、国家の最大の関心事は国力増強であったが、そのためには富と人口をとともに増大させることが不可欠であるとの考えから、正常な秩序の維持に関心が向く。疫病の蔓延や火災によって住民の生命が失われることは当然避けなければならないし、多くの健康な人々が結婚によって結ばれ、多くの健康な子供たちを産まなければならない。そのためには都市のインフラを整備し、安全と衛生に配慮する必要があるし、また人々をその内面から規律化し健全な風紀を維持する必要もあ

---

31) ポリツァイについてはゲルハルト・エーストライヒ（阪口修平・平城照介訳）「ヨーロッパ絶対主義の構造に関する諸問題」、F. ハルトウング、R. フィーアハウスほか（成瀬治編訳）『伝統社会と近代国家』岩波書店、1982年、233～258頁所収；W. エーベル（西川洋一訳）『ドイツ立法史』東京大学出版会、1985年、102～114頁；ゲルハルト・エーストライヒ（千葉徳夫訳）「ポリツァイと政治的叡知—ドイツ・バロック時代の都市と国家における社会・政治思想の展開—」、ゲルハルト・エーストライヒ（阪口修平・千葉徳夫・山内進編訳）『近代国家の覚醒—新ストア主義・身分制・ポリツァイ—』創文社、1993年、127～145頁所収；Hans Maier: Die ältere deutsche Staats- und Verwaltungslehre, 2. Aufl., München 1980; Michael Stolleis: Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland. 1. Band, München 1988, S. 334–393を参照。以下、ポリツァイについての叙述はこれらの研究に基づく。

る。こうした課題を解決するために君主が用いたのがポリツァイであった。

ポリツァイが条例という立法形式で最初に登場したのは15世紀の都市においてであった。人口流入による治安悪化や疫病蔓延などの問題に対応する必要に迫られたからである。その後、三十年戦争による荒廃からの国家の立て直しという課題を課せられた君主たちによって領邦に導入され、18世紀には啓蒙絶対主義との関連で学問的体系化の試みもなされる。官僚養成の目的で大学に講座が設置された官房学（Kameralwissenschaft）<sup>32)</sup>においてポリツァイは学問の対象ともなったのである。官房学の体系には、下位区分として家の統治を扱う家政学（Ökonomie）が含まれるのが通例であったが<sup>33)</sup>、これはポリツァイの目的からして当然のことである。子供が生まれるのは家においてであるから家内部で正常かつ健全な秩序が保たれていなければならないし、出生率を高めるためには各家が繁栄することが望ましい。家政学とはこうした家内部の理想的な秩序維持を目指したものであり、家族成員の生活態度や教育、健康・衛生から農耕、牧畜、園芸、葡萄栽培、林業、水車等といった農村における生業に関する知識に至るまで、家の統治に関わるあらゆる事柄がその対象となっていた。

ポリツァイによる介入をその方法的側面において特徴づけていたのは予防的配慮（Vorsorge）である<sup>34)</sup>。人口増加にとって障害となる要因を特定し、それに対して予防措置を講じて生存率を高めていくことが目指される。データ収集を前提とした人口統計に関わる技術が重視されるようになったのもこの理由からである。経験上与えられる偶然的かつ例外的な事象としての危険をリスクとして認知して、それに対する措置をあらかじめ講じることができれば、その危険は制御下に置かれることになる。以後同様の事

32) Maier: Die ältere deutsche Staats- und Verwaltungslehre (Anm. 31), S. 164–181 を参照。

33) 海老原明夫「カメラルヴィッセンシャフトにおける『家』—J・H・G・フォン・ユスティの思想を中心として— (二)」, 『国家学会雑誌』94 巻7・8号 (1981年) 603～658頁、ここでは621～625頁を参照。

34) Vogl: Kalkül und Leidenschaft Anm. 26), S. 73–82 を参照。

態に陥っても同じ措置を繰り返せばよいのだから、その危険はもはや例外ではなく規則に統合されているのである。このやり方で危険を次々と制御下に置いていくことで生存の蓋然性は徐々に高まる<sup>35)</sup>。ここに見られるのは現実の経験に立脚しながら、基本的には同じことを繰り返しながらも、すなわち循環しながらも、漸次的に発展していく統治のモデルであろう。

## 6. 危機と発展

ヴァイマル着任からイタリアへの旅立ちまでザクセン＝ヴァイマル公国の行政の中心にいたゲーテが官房学的知識に通暁していたのは間違いなく<sup>36)</sup>、それが作品に表れていても不思議なことではない。『ヘルマンとドロテア』において、ヘルマンの父が町の整備事業について語るとき、ポリツァイの思考が混入しているのは明らかであるし、また、健康ゆえに多産を予感させる体を持ったドロテアが、出産を助け、清潔な水で産後の女の健康を配慮するとすれば、このイメージにポリツァイの理想を見ることも不可能ではない。すでに見た通り、ヘルマンが革命の諸理念と矛盾しない共同体像を思い至るためには、ドロテアの重たい体を受けとめなければならなかった。未来における家の発展、さらには町や国家の発展をも予感させるその体の重みを受け止めたことにより、ヘルマンの中で財産および祖国の防衛に対する共和主義的意識が芽生えたのである。最終的にドロテアの手になぶ二つの指輪は、二つの思考の併存のみを意味するのではない。ヘルマンの父やドロテアにおいて表れているポリツァイ的な発展への契機があるからこそ革命の諸理念が成り立ったのであり、両者の間には併存関係だけではなく因果関係をも見出せる。

35) Ebd., S. 152–170 を参照。

36) この点については例えば Bernd Mahl: Goethes ökonomisches Wissen. Grundlagen zum Verständnis der ökonomischen Passagen im dichterischen Gesamtwerk und in den „Amtlichen Schriften“, Frankfurt a. M/Bern 1982 を参照。

ではこの過程において革命自体はどのような役割を演じているのであろうか。それは二十年前の火災と同様であって、外的かつ偶然的な要因として危機的状況を生み出したという点にのみ意味を持つ。革命の激変が普遍的な諸理念を生み出したのではない。革命に対する熱狂の中で引き起こされた混乱——それは、ここでは無秩序で不潔な避難民や家内部における秩序の崩壊という形をとる——に対処することで共和主義的態度が自ずと生じたのである。展望であるとはいえ、これで共和主義への道筋は見えた。各人が自身の家の繁栄を目指して努力すればよいのである。道筋が見えたので、共和主義の理念に熱狂する必要はなくなり革命自体も無用となる。その意味で同種の危険は克服されたとも言える。このプロセスにおいて、危機が発展を促す要因として構成的な役割を演じているのは確かであるが、それが革命であるかどうかは偶然的でしかない。重要なのは危機それ自体とそれに対するポリツァイ的対応である。むしろこのプロセスによる共同体の生成は革命的なゼロからの創設ではない。家という既存秩序の構成要素を起点とした発展的な生成である。

しかし予測不可能な領域としての現実およびそこでの経験に立脚している以上、このモデルから不確実性を完全に排除することはできない。それはすでに経験済みのリスクに対しても当てはまる。ヘルマンが結末部分で祖国防衛への決意を表明している間、外では「雷がとどろき」「激しい雨が降り」「暴風がうなりをあげている」(IX, 175-177)。ところが物語の冒頭、正午の時点でヘルマンの父は次のように予言していた。

これだけの豊作をこんな上天気でむかえられるというのはめずらしい。これなら麦も、すでに取り込んである干し草なみに乾いた状態で取り込めるわい。空は晴れ渡り、雲一つないうえに東からは涼しげな風も気持ちよく吹いておる。この天気は長続きするぞ。麦はもう熟しきっている。明日は豊作の刈り入れを始めるとしよう。(I, 45-50)

ヘルマンの父はこれまでの経験から、晴天で、なおかつ東から涼しげな風が吹けば、その天候は長続きすると予想した<sup>37)</sup>。しかし実際は暴風雨である。せっかくの豊作も台無しになった可能性も排除できず、もしそうであれば、家計にとって大きな損害となりうるかもしれない。そう考えると家の繁栄を前提としたヘルマンの展望自体も疑わしいものに見えてくる。しかし現実を相手にしている以上、絶対確実な予想はありえない。経験を積み重ねデータを収集することで、近似値としての蓋然性を高めていくしか方法はないのだ。

---

37) Willer: „Ahndungsvolle Beleuchtung“ (Anm. 20), S. 76 を参照。